

普遍主義について

木村 武雄*

On Universalism

KIMURA Takeo *

Abstract

Universalism was originally used with the word in Medieval Ages on Catholic debate in Europe. Universalism was used in Russia and has used with diplomatic terms. In Peter the Great' Days there was a dispute the original Russianism versus Western Universalism. In those days Universalism was used for a synonymy with modernization in Russia. However Dostoevskii was one of the greatest thinker and novelist in the world. Now Universalism has been used with diplomatic terms. In UN the word caused a debate between European Universalism and United States Universalism. In other words old Europe versus new Europe.

抄 録

普遍主義は、元々中世欧州でカトリックの論争として生まれたものである。この普遍主義という言葉は、露そして現代では外交用語としても使われている。露では、ピョートル大帝時代より、露古来の主義と欧州普遍主義の対立の文脈の中で使われた。この時は普遍主義は露では近代化と同義語として使用された。しかしながら、19世紀を代表する露の思想家・小説家ドストエフスキー（1821-81）は、当時の欧州の最新の思想を体現していた。現代の普遍主義論争は、米国普遍主義対欧州普遍主義である。その論争が、イラク戦争を課題に国連の舞台で戦われたのは記憶に新しい所である。

Key words: Universalism, Romanticism, Vorstellung, Enlightenment, Empiricism, the rule of law, Hierachy, Roman Catholic, Rationalism, Messianism, Dostevski, Radishchev

キーワード：普遍主義、ロマン主義、理性、啓蒙、経験論、法の支配、階層制、ローマ・カトリック、合理主義、救世主信仰、後発の利益、ドストエフスキー、ラジーシチェフ

* 情報コミュニケーション学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

1. はじめに

本小論は、欧州の普遍主義に関して、時代的、国際的な流れの追求を目的とする。そこで、普遍或いは普遍主義のことばの定義を明確し、欧州の中世に於ける哲学・宗教上の論争を説明する。西欧化の流れに、抵抗しつつも、国内改革の為に、取り入れたロシアについても言及する。ロシアでは、ピョートル大帝の時代と、ソ連崩壊時の2度あった。この流れは、日本の明治維新も、同様であった。日本古来から文化と、西欧文化を導入する齟齬が国内の衝突を齎した。そして、明治時代に日本ではロシア文学が流行ったのは、そうした国内固有の伝統ある文化を廃棄し、国の発展の為西欧文化を取り入れる苦悩が同じ体験だったことによる所が大きい。そして、現代でも、イラク戦争を巡って、国連の対決の場となった、「新しい欧州対古い欧州」論争¹⁾も実は、名を変えた普遍論争だった。

2. 欧州に於ける普遍、普遍主義

普遍とは、遍（あまね）く広く行き渡っていることを意味する。万物に広く及ぶことであり、論理的には様々な特殊を包括する上位の階層にある名辞を言う²⁾。universalis（羅）、universal（英）、allgemein（独）、universel（仏）。

普遍は論理的には特殊と個に対する概念で、個から共通の性質を取り出していく過程を普遍化乃至概括という³⁾。経験的実在性をもつ個を指示する個体概念は、固有名詞と同様に、概念とは認められず、真の概念は普遍のみであるとする考えがある。哲学は普遍的なものを探究しようとして、プラトンの「イデア」やアリストテレスの「形相と質料」、カントの「法則」、ヘーゲルの「理念」は全てこの普遍的なものは経験的に直接捉えることが出来ないのもので、そのような普遍が果して存在するか否かを巡り普遍論争があった。

嘗ての欧州に於ける普遍とは、欧州の境界をどこに置くかに大きく依存する。ノーマン・デイヴィスによると、よく分かる⁴⁾。欧州の文化の中心は、法の支配、ヒエラルキー、ローマ・カトリック、合理主義である。これが欧州の普遍である。思想として捉えれば、普遍主義である。因みに、カトリック（catholic）の語源である、ギリシャ語のkatholikosには普遍（general, universal）の意味が含まれている。kata-はギリシャ語の「完全に」の意味、holosは「全体の」wholeの意味である⁵⁾。

又カトリック事典を引くと、「普遍主義」は、『(聖書の) 普遍主義、biblical universalism、神の救済意志はイスラエルの民だけでなく、他国民をも含むという、イスラエル人の国粹主義反対を説いたヘブライ人預言者たちの教え。とくに預言者ヨナはこの点を強調した』（現代カトリック事典、エンデルレ書店、589頁）。これはあくまで聖書のなかの「普遍主義」で本小論の哲学的課題とは異なる。

3. 欧州中世に於ける普遍論争

普遍主義の背景にはローマ帝国による広大な領土を統治するというテーマが存在した。その思想的支柱としてスコラ哲学があった。狭義の中世哲学は、西方に於いて9世紀から15世紀にわたって学校（スコラ）を場として学僧としての旅人によって形成されたので、スコラ哲学と呼ばれた⁶⁾。スコラ哲学は、キリスト教教理と、アリストテレスの哲学を融合させたものであり、プラトンの観念論は抑圧されることになる。

中世初期の苦闘の時代を過ぎ越し開花した「12世紀ルネサンス」と呼ばれるこの中期スコラ哲学（12世紀）時代には、商工業の発達とともに都市化も進み、従来の農村型修道院付属学校に代わって都市型の司教座聖堂付属

学校で哲学が模索された。「都市の空気は自由にする」パリでは、後にエロイズとの恋物語で有名となったアベラルドゥスが弁証論の大家として所謂「普遍論争」を仕掛けた⁷⁾。彼はボルビュリオスがアリストテレスの『カテゴリー入門』で問い、ボエティウスによってラテン的問題となった「普遍(類、種)は実在するか否や、もの(res)や音声(vox)という問いを思索したのである⁸⁾。

ここで当時の普遍論を大略概観すると、(1)ものに先立ってある(ante rem)とする教説(極端な実在論としてのプラトンのイデア論、アウグスティヌスの範型論等)、(2)個体の中にある(in re)とする教説(個体の中に分割されてあるとするアンセルムスの実在論や、個体の本性に基礎をもつとする緩和されたシャルトル学派の実在論等)、(3)個体の後にある(post rem)とする唯名論(普遍を「音声の風 flatus vocis」とするロスケリヌス等)に大別される。アベラルドゥス自身は、普遍がものを表示する言葉(sermo)であつてももの状態を表示するとして、普遍を事物や概念と区別された言語論の次元で模索して唯名論者の域を越え、現代哲学と共鳴している⁹⁾。しかし当時の哲学は、事実上、狭義の弁証論に限られ、三段論法的推理の合理性をそのまま根拠に至る道とした点は否めない。それ故、既にペトロス・ダミアニ(11世紀)のように、弁証論的「哲学は、神学の侍女」という弁証論への不信を表明した人がいた訳であり、シトー会士のベルナルドゥスは、弁証論より十字架の謙遜を学んで意志・愛を通じた根拠に帰郷する道を説いた。弁証論と信愛の哲学を「知解を求める信」の方法によって止揚統合した人こそ、「スコラ哲学の父」と称されるカンタベリーのアンセルムスであつた。この折衷案が出で、ひとまず論争は中止するが、依然くすぶり続けることになる。そして、中世には神だけに向けられた哲学的関心が、15~16世紀に於ける東方世界

への視野拡大に伴って、ギリシャの古典思想の再生(ルネサンス)を迎えることになる。人間そのものの「グローバル」な理解を目指そうとする人間主義的関心へと転化する¹⁰⁾。西欧近代哲学の祖と言われるデカルトにあつては、他の存在を必要としない実体としての全知全能の神でさえ、その存在が「我思う」という人間精神を梃子にして証明される。そうして神観念のごときが人間にとって「生得観念(idea innata)」であるか否か、また数学的合理性にどのような位置づけを与えるかを巡って、西欧近代哲学はスピノザやライプニッツ達の欧州大陸「合理論」(理性の哲学)と、ロックやバークリーやヒュームらの英国「経験論」に分岐していく。経験論は諸観念が人間の経験からのみ派生すると考える点で人間中心主義を徹底させたと言えるが、しかし「あらゆる認識は経験とともに始まる……が、全てが経験から派生するのではない」として合理論と経験論との融合を図つたのがカント¹¹⁾であつた。所謂ドイツ観念論にあつても、あらゆる経験や思考の主体たる自我の何たるかが哲学研究の中心課題となる¹²⁾。

4. ロシアに於ける普遍論争

ロシアは長い間巨大な農奴制の上に立脚して、スラヴ的な伝統的ナショナルリズムと普遍的価値の対立、そしてその統合というサイクルの繰り返しが続いた(袴田茂樹『プーチンのロシア法独裁への道』NTT出版、2000年¹³⁾)。そして、そうした貴族的な風土から生まれた思想の中で王権と貴族による統治、という構造が続いた。

15世紀ロシアの精神生活には2つの主要な伝統が認められる(G. ヴェルナツキー、松木栄三訳『東西ロシアの黎明』風向社、1999年。[George Vernadsky, *Russia at the Dawn of the Modern Age*, Yale University Press, 1959]¹⁴⁾)。

主に農民や農奴の間で根づいた古スラヴ的と呼んでもよい古代的伝統と、主に貴族的インテリ層に広まった、より新しいビザンツ的、キリスト的、普遍的伝統とである。古スラヴ的な宗教観念や祖先崇拜は人々の精神や心に深く刻み込まれていた。この古代的基盤の上に、10世紀になってからキリスト教（ギリシャ正教）が重ねられたのである。公的にはキエフ時代に全てのロシア人が改宗したことになっているが、キリスト教がしっかり根を張ったのは都市の中だけで、農村には教会も少なかった¹⁵⁾。そして、キリスト教に、ロシアなりの味付けが成された。ロシアはもともとユーラシア的背景を持ち、また1243年から1480年までの長い間「タタールの軛（くびき）¹⁶⁾」と言われるようにモンゴル人に支配されてきたので、この時代のロシアの生活や文化は、東方からかなりの大きな影響があったと考えられる。とはいえ、キリスト教とイスラム教との間には尖鋭的な対立があったから、ロシアの宗教生活に決定的な影響を与える可能性はなかった¹⁷⁾。むしろ、モスクワ公国の行政制度や軍隊組織等は多くの点でモンゴル式を真似たものだった。財政に関する一連のロシア語はタタール語からの借用である（例えば、タムガ＝関税¹⁸⁾、デニガ＝貨幣¹⁹⁾）。ロシアとカトリック的西方の基盤は共通だったが、ギリシャ正教とローマ・カトリック教会との分裂がロシアと西方との文化的障壁を割り出す結果になった。そして、キエフ公国が、当時のビザンチン帝国からギリシャ正教を受け入れた時、正教と対立するカトリックに対する激しい憎悪や不信も入ってきた。そして、その2つのこと（ギリシャ正教への熱烈な帰依と、カトリックに対する激しい憎悪）がロシア人のメシア意識を生み出す重要な原因となった（高野雅之『ロシア思想史－メシアニズムの系譜（新装版）』早稲田大学出版部、1998年²⁰⁾）。ロシアはより西方のポーランドやリトアニアと違い、西

方の影響（ローマ・カトリック）が最も微弱だった。その原因は、一つにはモスクワが西方から遠隔の土地であったという地理的背景もあったし、もう一つには東ロシアのモンゴル支配が西ロシアのそれに比べて一世紀も長く続いたことにもあった。また、モスクワ国家の形成に正教会が極めて重要な役割を負ったこと。14世紀中葉以降は、正教会はタタールに対するロシアの抵抗と独立闘争に於ける精神的指導者になっていた²¹⁾。正教会が当時のロシアの普遍主義を形成した。18世紀初頭、帝政ロシアの礎（いしずえ）を築いたピョートル大帝（在位 1682-1725年）が古いロシアを改革しようとした時、彼はそれまでのモスクワ公国的な土着のロシアに、当時としては普遍主義と言ってもいい西欧の文化や科学、技術、制度、生活様式を導入して、政治体制もロシアの生活も西欧的に改めようとした²²⁾。

だがこの「文明開化」の改革は当時のロシアの伝統的な社会からは、自分達が守ってきた基本的価値、或いはアイデンティティを否定する行為と受け止められた危機感をもって迎えられた。特にロシア正教を墨守していた人々は、キリスト者のシンボルである髭を蓄えてることを禁止したり、髭に課税したりしたピョートル大帝を「悪魔の手先（アンチクリスト）」と呼び、また大王が欧州の建築家を招いて作り上げた、モスクワとは全く異なるバタ臭い西欧的都市サンクトペテルブルクを「悪魔の町」とみたほどである²³⁾。

この土着的（或いは古スラヴ的）なロシア・ナショナルリズムと普遍主義的な西欧文明のぶつかり合いのなかで両者のアマルガム（合金）として生まれたのが、「帝政ロシア」という新しい伝統、新しいナショナリズムだった。トルストイの『戦争と平和』には、西欧文化とロシア愛国主義の融合した帝政ロシアの新しいナショナリズムの雰囲気が見事に描かれている²⁴⁾。

欧州の17～18世紀市民革命・市民社会形成の屋台骨となったのは啓蒙思想である。啓蒙思想とは人間理性によって人民・社会をよりよい文明へと進歩させるものとしてあった。とりわけフランスのサロンの土壌の中で、啓蒙思想はスコラ哲学・教会権力への抵抗から革命を予兆を孕み、思想、国家、法律、道徳、人類史とあらゆる領域の批判と刷新を図る。英国経験主義や独ロマン主義と呼応し、反発する側面を持っている（『哲学思想翻訳事典』「啓蒙」）。

18世紀欧州に於ける啓蒙主義に対抗して露啓蒙主義を確立した思想家にラジーシチェフ（1749-1802）がいる。1790年に農奴制を激しく批判した『ペテルブルクからモスクワへの旅』を自宅の印刷所で印刷し、出版したが発禁処分となり、逮捕され、死刑を宣告された。後に10年のシベリア流刑に減刑された。この著で、彼は一旅行者の手記の形を借りて、農奴制下の農民の悲惨な生活を描き、改革の必要を訴えている。露啓蒙思想を代表する著作である（『新版ロシアを知る事典』「ラジーシチェフ」）。

19世紀の際立った特徴の一つは、イデオロギー（観念形態）としてのナショナリズムが、欧州の中心とする政治的、文化的影響力をもつようになったことである（廣岡正久『ロシアを読み解く』講談社、1995年²⁵⁾）。こうした現象が、フランスの市民革命が典型的に示しているように、当時の広汎な経済的、社会的、文化的な変化にも起因するものであったことは言うまでもない。欧州の辺境に位置するロシアも、ナショナリズムという新しい政治的イデオロギーの影響から逃れられなかった²⁶⁾。

民族的覚醒を強要されたロシアの「応答」が始まるのはこの時点からである。欧州の「挑戦」に対する「応答」としてのロシア・ナショナリズムの思想形成は、欧州の感化を受けて、何よりも先ず第一に、怒濤のように

押し寄せた「ドイツ・ロマン主義」の波に洗われて齎（もたら）されることになる²⁷⁾。

そして19世紀の20年代30年代になると、ロシアの思想家達は、西欧より遅れて発達したロシアは「後発の利益」を享受でき、西欧が陥っている誤りを避けて通れるとさえ、思うようになった²⁸⁾。例えば、このころの思想的状況を描いた一種の哲学小説『ロシアの夜』の作者はオドエフスキは、「19世紀はロシアのものだ」「ロシアは欧州の肉体だけでなく、魂も救わねばならない」と、自信をもって自分の主人に叫ばせている²⁹⁾。

そう叫ばせた背景にあるのは、後発の有利さを利用すれば西欧の欠点を避けて通れる、という消極的なロシアの特権意識だけではない。ドイツ・ロマン主義の影響も大きい。

1820年代、ロシアの思想家がドイツ・ロマン主義に熱中したのは、外から影響のものとして、ナポレオンの進入があり、国内的原因としてデカブリスト達の運動の挫折、ニコライ皇帝の専制的統治の始まりがあった。哲学や文芸の新しい理念であるロマン主義は、18世紀末に、それまで主流だった啓蒙主義や古典主義への反動として西欧に広まった。

一般的に言えば、ロマン主義は、啓蒙主義の特徴だった理性の尊重とか、理性万能の考え方に反対した³⁰⁾。人間の理性を開発していけば、人類には無限の進歩が約束されているという考え方に反対して、理性だけでは認識できないような非合理的な世界、理性だけでは解明できないような有機的な統一を持った世界、そういう世界こそその本当の姿であり、そこにこそ目を向けなければならないと主張した³¹⁾。

また、ロマン主義は、啓蒙主義の特徴だった普遍主義にも反対した。理性を開発して得られる無限の進歩は、国民や民族の違いを越えて、世界中へ、全人類へ、遍（あまね）く適用し広げていくことができるという、普遍主義的な考え方に反対し、そういう普遍主義

では律しきれない個別のもの、「個」の独立性や重要性を強調した³²⁾。

普遍的な欧州世界全体についての関心より、自分の祖国に対する関心の方が思索の中心となり、どの国やどの民族にも共通な法則ではなく、自分の国だけの特殊性が探究されるようになった³³⁾。

1812年、モスクワまで進入したナポレオン軍を、ロシアは追い出した。敗走するフランス軍を追って、今度はロシア軍が欧州の中まで入り込んだ。ロシアは初めて西欧と対決し、しかもその最大勢力に勝利した。そればかりではなく、旧秩序に戻った欧州で、ロシアは自由主義や革命勢力を抑える憲兵の役を任され、解放者としての自信を持ち、そうした自信から新しいナショナリズムを生み、それがまた、世界の歴史に於いてロシアが果たすべき役割についての新しいメシアニズム(救世主)を、やがて生み出すことになる³⁴⁾。1853年7月、ロシア軍は4万の兵力をドナウ川の南岸へ送り、(英仏の支援した)トルコとのクリミア戦争になった。これはそもそも、フランスのナポレオン三世が口火を切ったことから始まった。それまで、正教徒が握っていた、トルコ占領下のパレスチナの宗教的管理権をカトリック教徒に譲るようにトルコに請求した。ロシアのニコライ一世は、トルコ領内の正教徒の安全保護をトルコ政府に要求するという形で、これに応酬した。実際には、聖地巡礼者が落とす莫大な金は誰が握るか、近東の利権や海峡の支配権は誰が握るかという争うだった。しかしロシア政府の掲げた旗は宗教戦争の旗だった。回教徒トルコ人の支配下で苦しむバルカンのスラヴ人正教徒を解放し保護するという、十字軍の旗が翻(ひるが)った。ロシア社会の世論は、それに迎合し、これは「聖戦」なのだという、官民一体の叫びが高まった³⁵⁾。

19世紀に澎湃(ほうはい)として興ったロシア・ナショナリズムが、スラヴ主義の宗教

哲学や社会哲学によって深化し、またある程度体系化されたことは疑いのない所である³⁶⁾。ドイツ・ロマン主義哲学によって播種されたスラヴ派のナショナリズム思想は、ロシア正教の精神的風土の中で生まれ育ったロシアの貴族階級が耕し、施肥(せひ)した「モスクワ」ロシアの土壤に発芽したものであったといえよう。その思想的核心は何よりも第一に、「啓蒙主義時代」に対する反動であり、18世紀欧州が体現した抽象的な「コスモポリタニズム」に向かって放たれた抗議の声であり、欧州とは異質なロシアの民族的個性と歴史的使命の認知を求める民族主義的な衝動であった。スラヴ派は、欧州近代にロシアの発展モデルを発見した西欧派との論争を通じて、その思想を整備していった³⁷⁾。

スラヴ派の代表的思想家イヴァン・キレエフスキー(1806-56)によれば、欧州・露文化の差異は、宗教的なものにより本質的なものを発見するとした。欧州が「合理主義的、唯物論的、形式論理的、分裂的で、個人主義と人間存在の外的形式を重視する文明」に対して、ロシアは、「有機的、伝統的、神秘主義的で、精神的に統一された精神文化」とした³⁸⁾。

スラヴ派の思想には、没落しつつある「俗なる」欧州に対する、一体的な精神を保持する「聖なる」ロシアの優位というテーマが「強迫観念」のように固着している。そしてそれは、今日のロシア民族主義達が繰り返し唱和している主張である。スラヴ派の主張によれば、ロシアはキリスト教信仰が最も純粋な形で具現化された世界であって、そこでは個人は全て教会という「霊的共同体(ソポールノスチ)」のうちに包摂されるのであり、そして全てこの共同体にこそ民族的一体性を実現する基礎を見出すことが可能であるといた。そして、「没落しつつある」欧州を、共通のキリスト教を基盤に、「聖なる」ロシアが救済しなければならないとする、メシア思

想をスラヴ派思想が持っている³⁹⁾。

1825年12月、デカブリスト（12月党员）と呼ばれる若い貴族達がフランス革命に心酔して、やはり普遍主義的な思想、詰まり啓蒙主義や立憲主義に鼓吹されて、帝政ロシアを政治的に改革しようとしたと蜂起したが失敗に終わった。19世紀後半のクリミア戦争後にも農奴制を中心とする様々なロシア社会が欧州社会と比べて矛盾点が明白になると、ナロードニキと呼ばれる人民主義者やアナーキー（無政府主義者）、社会主義者が、そして20世紀初頭にはカデット（立憲君主党）と呼ばれる自由主義者達も、保守化した帝政ロシアの体制崩壊を企てた。社会主義も無政府主義も自由主義も共に、特定の国や民族の文化とか価値を特に称揚する訳ではないという意味で普遍主義的な思想であり、それらは啓蒙主義の落とし子でもある⁴⁰⁾。

19世紀の露は文化的に二分されていた。即ち、西欧主義者達とスラヴ主義者達である。前者は露を文化的に西欧化しようとする人々で、哲学的には唯物論（フォイエルバッハ）、実証主義（コント）、悲観主義（ショーペンハウエル）、宗教的には無神論者（ニーチェ）であり、政治的には当然帝政露に反対し、より自由主義的な国家を求める。このような傾向は欧州の近代が本質的なものである以上、容易に理解できることである。後者は露の土着文化の価値を尊重する立場であるが、露の土着文化は露正教と切り離せない。従って露正教を弁護するというよりも、西欧的近代主義の中には見出しえない解答を露正教の中に見出そうとする。その代表者がドストエフスキーとか、神学者ではソロヴィヨフ（1853～1900）等である。彼らが露正教の中に欧州のニヒリズムに対する解答を見出したのは、露正教が近代西欧の二元論を越えた神を求めているからである（小田垣雅也『キリスト教の歴史』）

ドストエフスキーは露正教の思想を代弁し

ている。既に述べたように露では西欧主義者とスラヴ主義者が対立し、ドストエフスキーは後者に属していた。西欧主義とは当時の欧州の近代主義的思想（即ち唯物論、実証主義、悲観主義、無神論等）のその基本的な立場は無神論である。ドストエフスキーの主張の一つは、このような欧州の合理主義と、その背後にある神を忘れた人間の自己主張は、人間の破壊を齎すだけだということである。ドストエフスキーによると、神を見失うと人間は破滅に陥る。『カラマーゾフの兄弟』のイヴァンがその典型である。それに対して、「神人」を代表しているのがアリョーシャである。強要されたり命令されたりした愛は愛ではないのであって、その意味で神すらが、人間の自由かつ自発的なものでなければ、人間の応答を受け入れられないという、神と人間との相互性、同時性が、これらの人物を通じ描かれている。要するにカトリック、プロテスタントを含めて、西方教会のように神と人間とを二元論に捉える場合、キリスト教は基本的には神と人間の主導権争いになる。その結果は、トレンチに見られるようにキリスト教の解体に連なるか、又は近代のカトリックのような偏狭さになりがちである。露正教はこの欧州的構図は別の枠組みで欧州の近代主義を批判し、それによってキリスト教に対して一つの示唆を与え、更に東洋思想との対話の可能性すら暗示している（小田垣雅也『キリスト教の歴史』）

1917年4月3日亡命先のスイスからドイツ軍ルーデンドルフ將軍の封緘列車を利用して警備されロシアへ入国したレーニンにより、帝政ロシアが打倒され、ロシア共産党政権が出来た。つまり、表面的には共産主義というインターナショナルな普遍主義が、伝統的なロシアを倒したのである⁴¹⁾。

しかし、革命に成功したとはいえ共産主義の理念も帝政ロシアに育ったロシアの民衆にとっては、疎遠なもの或いは何か違和感を抱

かせる異質なものだった。ロシアでは、決して共産主義の理念が広範な民衆を捉えたのではなかった。人々が共産党を支持したのは、戦争と混乱、無秩序と貧困にうんざりした彼らが「平和と土地」のスローガンに強く惹かれたからであり、又その頃ロシアでは共産党が唯一秩序を齎（もたら）すことのできる政治勢力だったからであった⁴²⁾。

アナトル・レルア＝ポリューによれば、ロシアは二面の女神で、一方が東にもう一方が西に向いており、これが矛盾や反対を発生させ、二面的な政治を説明している。そしてこれは地理上でもユーラシア大陸の殆どはロシアであった。欧州的性格とアジア的性格を併せ持っている（和田春樹「ロシア史の二元性」）。

ユーラシア主義の思想は、1920年代、露革命によって欧州への亡命を余儀なくされた露知識人の中から生まれた（丘由樹子「「ヨーロッパ」と「アジア」の狭間－「ユーラシア」地域の概念再考」）。ユーラシア主義は先ず何よりも、露を「欧州でもアジアでもない、ユーラシア」であると宣言したテーゼとして知られる。19世紀以来、露の自己認識を巡って、100年近くの間「西欧かスラヴか」という枠組みの中に収まり続けていた。

欧州をモデルとした近代化や国家形成は、地域に本来あるべき多様性を破壊し、これを画一化し、更には、社会・文化に於けるエリート層と民衆層を引き裂く結果を齎した。ユーラシア主義が案出した「ユーラシア」は「欧州」へのアンチ・テーゼとして論ぜられ、前者は多様性、後者は（国民国家を形成する）画一性・均一性の特徴が提示された。露のユーラシア主義者は、排他的で狭量なナショナルリズムや分離主義に対抗することを目的に、多様性を内包する広大な多民族地域「ユーラシア」への帰属意識を提唱した。この点で、ユーラシア主義は、脅威を排除することにより、より大きな総体の中にこれを

包摂することで、対立を乗り越えようとした思想である。しかし、この広大なユーラシアを統治しようという志向が、ともすれば一種の覇権主義に陥る危険性を秘めていることは否定できない（丘由樹子「「ヨーロッパ」と「アジア」の狭間－「ユーラシア」地域の概念再－」）。

1924年秋、スターリン⁴³⁾が一国社会主義の理論を唱（とな）え、1930年代にはスターリン主義がロシアを席卷するようになる。これはマルクス主義という社会主義と、帝政ロシアの伝統的ナショナリズムが融合して生まれたロシア独特のナショナルな社会主義、すなわち新たなソビエト・ナショナリズムであった⁴⁴⁾。

スターリン主義というナショナリズムも、暫（しばら）くすると、新たな普遍主義の挑戦を受けることになる。1960年代後半から80年代初めに掛けてのブレジネフ時代に、統制経済の非効率、官僚制の弊害、社会的沈滞等様々の問題が噴出した。フルシチョフのスターリン批判から、穏やかな自由化路線をスタートしたが、これに刺激されてサハロフやソルジェニーツィンらの反体制知識人達が人権擁護とか自由とか民主主義の理念を掲げた。ただ、60年代には、こういった普遍主義の理念は一般大衆にとってもまだまだ疎遠なもので、70年代までは共産党の影響下にあった人々は反体制知識人を売国奴として敵視した⁴⁵⁾。やがて80年代になると、82年11月、18年間続いたブレジネフ時代が終焉した。その後を継いだアンドロポフ書記長（1914～84）は1年3ヶ月、チェルネンコ書記長（1911～85）は1年も経たない内に相次いで死去した。高齢の書記長ではこの国で持たないと悟った政治局は、85年3月50代そこそこのゴルバチョフ（1931～）を書記長に託した。ゴルバチョフはベレストロイカという大胆な民主化改革路線を打ち出したが、ソビエトのナショナリズムの伝統に対して普遍主義的な

原理をぶつける試みだった⁴⁶⁾。彼は社会主義の枠内で民主化と経済の市場化を進めようとしたが、結局この路線は経済的に破綻をきたし、社会的混乱を極め、そして政治の自由化路線は連邦構成している共和国の独立化を促して連邦を崩壊させ連邦大統領である彼自身をも失脚させた。

ゴルバチョフ時代、或いはエリツインの時代に掲げられた改革の理念、民主化理念は、伝統のソヴィエト・ナショナリズムに突きつけられた普遍主義の刃（やいば）であった⁴⁷⁾。2000年以降政権の座についたプーチン（1952～）は、チェチェン紛争の勝利を足掛かりに政治的基盤を強化し、石油の価格高騰とともに経済的基盤が強化され、国内の政治的権力を磐石のものとした。彼の掲げた旗は、ソヴィエト・ナショナリズムに訴える路線で、前の政権の普遍主義的政策とは、違う。しかしながら、経済自由化の方向性を堅持しつつも、若干揺り戻しがある。スラヴ主義が強い時代には往々にして極端な反ユダヤ主義に陥ることが、ロシアの歴史では度々登場する。帝政ロシアのポグローム、スターリンのトロツキーを始めとするユダヤ系指導者の追放、そして現代ロシアのプーチンのホドロフスキーを始めとするユダヤ系新興財閥指導者の相次ぐ追放・逮捕である。

E.H. カーによれば、ロシアは「上からの革命」（イヴァン雷帝の統治、ピョートル改革、大改革、スターリンの国家社会主義化、ペレストロイカ）の間に革命（1905年の失敗した革命、1917年の革命、1991年の8月革命）が挟まっている。「上からの革命」の連鎖が革命によって破られるのが、ロシア史のパターンとした（和田春樹「ロシア史の二元性」4学会共同大会（ロシア・東欧学会等、名古屋学院大学於いて）、2008年）。

プーチン政権を支えるのは、武闘派（出身母体の治安・軍関係者）、出身地のサンクト・ペテル・リベラル派、エリツイン時代に隆盛

を極めた新興財閥派のトロイカ方式だった。前期は武闘派（シロヴィキ）主導で、新興財閥派（オリガルヒ）を政権中枢から排除するのが主な構図だった（畔蒜泰助『今のロシア』がわかる本』三笠書房、2008年）。ユコス事件では、国際テロ問題並びに税金天国地を利用した資金洗浄問題が焦点だった。シロヴィキの力を利用して、オリガルヒを一掃し、エネルギー部門を実質的に国家管理に置くのに成功した。これに対して、欧米メディアは、ホドロフスキーの逮捕は、プーチン政権の民主主義の抑圧や国家による反ユダヤ主義、その延長上にあるウクライナやチェチェン問題へのロシア影響力強化を狙ったものとの論調が多い。

プーチン外交は、①「対テロを軸に米国との戦略的關係」と②「エネルギーを軸に独との戦略的關係」が柱になっている。①の反対勢力は、米国のネオコン派とイスラエルだった。②の背景には、パイプラインの通過国であるポーランド、ウクライナやベラルーシとロシアとの確執がある。

プーチンの高い支持率は、露の安定性というよりも、混乱・無秩序に対する不安感から秩序を求めるとのことだと思われる（袴田茂樹「ロシア・東欧の歴史と現代（政治）」、4学会共同大会（ロシア・東欧学会等、名古屋学院大学於いて）、2008年）。

5. 現代に於ける普遍論争

渡邊啓貴によると、米国の「冷戦勝者」の意識は、先進文明を象徴する「西（ウェスト）」＝「西側世界」の担い手は今や米国であるという議論に良く示されているとされる⁴⁸⁾。欧州側は西欧文明の継承者は自分達と思っている。ところが、冷戦に勝利した米国は今や国際社会に於ける価値観そのものが米国的になってきており、米国こそが西欧文明の継承者であり、発展の任を一身に担って

いると主張しているとされる。

そして、古矢洵によると、米国の外交理念は、「普遍主義」に支えられているとした⁴⁹⁾。彼によると、アメリカニズムの起源として、①「辺境」②「聖地」③「理念国家」④「人種主義」⑤「排他主義」という意味で19世紀的な歴史文化に言及している。

これらの幾つかの論点は、前節のスラヴ派の主張と合い通じる議論である。違う点は、ロシアのスラヴ派は欧州普遍主義に対抗した思想とした点で、これに対して米国の思想は欧州普遍主義の継承者とした点が異なる。ロシアは欧州の辺境であり、汚れた欧州に比べて、「聖地」メシアのロシアという点では、米国も妥当する。一国主義⁵⁰⁾や大国主義や孤立主義的側面も妥当するかもしれない。そして20世紀にはいり、米国の経済的、軍事的援助による「世界民主主義の救済」という名目のもとに「介入主義」「国際主義」が肯定された。これは、ロシアのクリミア戦争の同じ価値観を持つ人々の救済という名目（米国の場合、民主主義ももつ人々の救済）で戦争を正当化した点も共通である。世界の警察として国際紛争に軍事介入することが20世紀の米国外交の特徴である。建国以来、清教徒精神に基づくこの理想主義的な普遍主義は民主党でも共和党でも基本的に同じである。

滝田賢治によれば、このような米国外交を、①法律家的・道徳家的発想、②共産主義の拡大を懸念したフランクリン・ルーズベルト大統領の「隔離演説」に見られる国家や世界を生物や病原菌のアナロジーで認識する傾向、③真珠湾攻撃に見られる外国からの奇襲攻撃に対処する為の国防力の保持という強迫観念、④米国の例外主義として纏めている⁵¹⁾。これらは、いずれもブッシュ大統領の外交政策に明瞭となっている。自由主義の極端な理想化、テロや大量破壊兵器の脅威に備えた「悪の枢軸」や「不安定の弧」という発想は自らに対抗する敵の勢力拡大への過剰

な迄の警戒感と防衛力の強化も齎すが、それは米国だけの例外と解釈されるのである。

2003年1月中旬、イラク軍事介入を巡って国連の場で、2つの普遍主義の対立した極度の緊張が予想された。それは、安保理決議1441に従って、前年11月26日に開始された軍事施設の査察の最終報告が予定される1月27日が近づいてきたからであった。

査察を確認してからとすると独仏の慎重姿勢を揶揄して、対イラク強硬派米国のラムズフェルド国防長官は、彼らを「古い欧州」と言い放った。ラ長官は、「私は独仏を欧州と考えてない。それは「古い」欧州だと思う。欧州全体を見回すと、その重心は東に移っている。(……) 欧州の多くの国を考えてご覧なさい。それらの国々は、フランスやドイツと一緒にではない。米国とともにある」と語った⁵²⁾。

米国政権内では、東欧出身（多くはユダヤ系）の要人が、対欧州政策の立案者である。かつてのキッシンジャー、オルブライト、ブレジンスキ、ホルブルック等である。リトアニアで1998～2002年大統領と務めた米国移民のアダムスク、ラトヴィアでは1999年以来、米国と同盟国のカナダから再帰化したフライベルカが大統領と務めたごとく、バルト三国の出身の米国系が陸続きと帰国しており、政財官界の指導層を形成している。グルジアの大統領のサーカシビリは、米国のコロンビア大学法学部を出で、ニューヨークで弁護士をしていた。米国の普遍主義の浸透に彼らは旧社会主義国で貢献しているのかもしれない。欧州側から、言わせれば、米国は欧州から移民で形成された国で、普遍主義の自家・本元は欧州自身と思っている。歴史的に見れば、合理主義や民主主義、人権等は、欧州が発祥の土地であるからである。

6. おわりに

普遍主義は、当初はローマ・カトリック教会の思想であった。中世の時代は、宗教生活が価値観の全ては決定しているが如くであった。しかしながら、当時のインテリは、宗教関係者に限られ、思想を一般民衆に大量伝播する手段も欠けていた。これは、日本でも仏教伝来は、僧侶によって齎されたと同様である。読み書きというリテラシイは、僧侶という当時の唯一のインテリ層に限られていた。普遍主義は、西欧に於いて多くの戦争や革命を通じて成熟したものがほぼ完成した。西欧では、法の精神、合理主義、人権の尊重とかいった共通の価値観の普遍主義が行き渡っていた。遅れて発達したロシアは、近代化するに当たり、普遍主義を受け入りは避けがたかった。ピョートル大帝はそれを強制をもって導入した。しかしながら、その結果それまでに構築されたロシア独自の文化との齟齬が生じさせることになった。これらの融合が長い間にロシア的味付けで、ひとつのものとして形成されていった。社会主義政権ができるまで、これまでロシア的文化との融合で、ひとつの普遍主義である、ソヴィエト・ナショナリズムを形成した。以後フルシチョフのスターリン批判、ゴルバチョフのペレストロイカの波を浴びたが、そして現代のプーチン政権では、逆にスラヴ派の思想という反普遍主義（反西欧主義）が全面に出てきている。現代の外交面で、普遍主義はイラクの大量破壊兵器の査定を巡っての国連での米国と独仏の「新旧欧州論争」というコンテクストで使われている。言わば、普遍主義の本家論争となっていった。

参考文献

- 1) 木村武雄「政治経済システムとポーランド国民」中野守編『現代経済システムと公共政策』中央大学出版部、2006年、343～363頁。
- 2) 石塚正英他監修『哲学思想翻訳事典』論創社、2003年、243頁。
- 3) 同上書、243頁。
- 4) ノーマン・デイヴィス『ヨーロッパ』共同通信社、邦訳Ⅱ 27～105頁。
- 5) 小稲義男他編『研究社 新英和大辞典（第5版）』研究社、1980年。[catholic]
- 6) 山本 巍他『哲学 原典資料集』東京大学出版会、1993年、76頁。
- 7) 同上書、77頁。
- 8) 同上書、77頁。
- 9) 同上書、77頁。
- 10) 同上書、105頁。
- 11) 木村武雄『EUと社会システム』創成社、2008年、167～173頁。
- 12) 山本 巍、前掲書、105頁。
- 13) 袴田茂樹『プーチンのロシア 法独裁への道』NTT出版、2頁。
- 14) G. ヴェルナツキー、松木栄三訳『東西ロシアの黎明』風向社、10頁。
- 15) 同上書、10頁。
- 16) 木村武雄『経済体制と経済政策』創成社、2003年（5刷版）（初版1998年）、50、131頁。
- 17) G. ヴェルナツキー、前掲書、11頁。
- 18) 木村武雄『経済用語の総合的研究（第6版）』創成社、2008年（初版2001）8～9頁。
- 19) 木村武雄『経済用語の総合的研究（第6版）』創成社、2008（初版2001）10～11頁。
- 20) 高野雅之『ロシア思想史』14頁。
- 21) G. ヴェルナツキー、前掲書、12～13頁。
- 22) 袴田茂樹前掲書、2頁。
- 23) 同上書、2頁。
- 24) 同上書、2～3頁。
- 25) 廣岡正久『ロシアを読み解く』講談社、56頁。
- 26) 同上書、56頁。
- 27) 同上書、56頁。
- 28) 高野雅之前掲書72頁。
- 29) 同上書、72頁。
- 30) 同上書、73頁。
- 31) 同上書、73頁。

- 32) 同上書、74頁。
 33) 同上書、74頁。
 34) 同上書、75頁。
 35) 同上書、167頁。
 36) 廣岡正久、前掲書64頁。
 37) 同上書、64頁。
 38) 同上書、65頁。
 39) 同上書、65～66頁。
 40) 袴田茂樹、前掲書、4頁。又亀山郁夫はドストエフスキー『罪と罰』の最終部には、二人の女性を殺害した主人公が「歓喜と幸福にむせんで」広場の地面に接吻するシーンがあるとした。かつて『罪と罰』と言えば、ナポレオン主義に託つた選民思想に被れ、二人の女性を殺害した青年が、ある娼婦との心の触れ合いを通して罪の意識に目覚める、という大凡の理解だった。寧ろその理解に誤謬はない。しかし、それは余りにも一面的過ぎはしないか。と疑問を呈している（亀山郁夫、「ペテルブルクの48時間」『日本経済新聞』2008年10月12日付け朝刊）。
- 41) 同上書、4頁。
 42) 同上書、4頁。西欧文化の二面性については、モーリス・デュヴェルシュ、宮島喬訳『ヤヌス 西欧の二つの顔』木鐸社、1975年 [Maurice Duverger, *Janus: LES DEUX FAC ES DE L'OCCIDENT*, HOLT, RINEHART AND WINSTON, 1972]。
- 43) 木村武雄『戦略的日本経済論と移行期経済論（第2版）』五紘舎、2008年（初版 2005年）、125頁及び木村武雄『ポーランド経済 第4版』創成社、68～69頁。
 44) 袴田茂樹、前掲書、5頁。
 45) 同上書、6頁。
 46) 同上書、7頁。
 47) 同上書、8頁。
 48) 渡邊啓貴『ポスト帝国 2つの普遍主義の衝突』駿河台出版社、74頁。及び Robert Bidleux et al., *A History of Eastern Europe, Second Edition*, London: Routledge, 2007., Andrzej Chwalba, *Józef Pilsudski Historyk Wojskowosci*, Kraków: TAIWPN Universitas, 2007., R.J. Crampton, *A Concise History of Bulgaria, Second Edition*, London: Cambridge University Press, 2005.
- 49) 古矢 洵『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』東京大学出版会、2002年。及び Sanjay Kathuria, Ed., *Western Balkan Integration and the EU*, Washington, D.C.: The World Bank, 2008., Boleslaw Olszewicz, *Kartografia Polska xvii Wieku*, Warszawa: Reto-Art, 2003., Boleslaw Olszewicz, *Kartografia Polska xv-xvii Wieku*, Warszawa: Reto-Art, 2004., Ryszard Przybylinski, *Hetman Wielki Koronny Mikolaj Mielecki*, Torun: Adam Marzalek, 2003., Jan Rzonca, *Polacy i Rosjanie na Przestrzeni Wieków (xvii-xx w.)*, Opole: Wydawnictwo Uniwersytetu Opolskiego, 2000.
- 50) 木村武雄『EUと社会システム』創成社、2008年、36～56頁。及び Janusz Skodlarski, *Zarys Historii Gospodarczej Polski*, Warszawa: Wydawnictwo Nauko we PWN SA, 2000., Grazyna Wojtkowska-Lodej, *Polska w Unii Europejskiej Uwarunkowania i Mozliwosci po 2004 roku*, Warszawa: Szkoła Głowna Handlowa w Warszawie, 2004.
- 51) 滝田賢治「プッシュ外交の方向性」『海外事情』2001年2月号。
 52) Rumrsfeld, Donald, "Press Briefing of the Foreign Press Center," January 22, 2003, www.defenselink.mil/news/January/t61232003.

参考文献

- 1 猪木正道『ロシア革命史－社会思想的の研究』、中央公論社、1994年。
- 2 E.H. カー、塩川伸明訳『ロシア革命－レーニンからスターリンへ 1917-1929年』、岩波書店、2000年 (E.H. Carr, *The Russian Revolution, from Lenin to Stalin, 1917-1929*, London: Macmillan Publishers, 1979.)

- 3 加藤恵司『法・思想・歴史』ジーオー企画出版、2008年。
- 4 京大西洋史辞典編集会編『新編 西洋史辞典 改訂増補』東京創元社、1993年。
- 5 ヘルマン・キンダー他著、成瀬治監修訳、『カラー世界史百科（増補版）』平凡社、41978年 [Hermann Kinder und Werner Hilgemann, *dtv-Atlas zur Weltgeschichte*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1964]
- 6 イアン・クラーク他編、押村高他訳、『国際関係思想史』新評論、2003年 [Ian Clark et., *Classical Theories of International Relations*, Macmillan Press, 1996]
- 7 近藤和彦編『西欧世界の歴史』山川出版社、1999年。
- 8 佐藤正英他編『新倫理』数研出版、1995年。
- 9 鷺見（すみ）誠一『ヨーロッパ文化の原型』南窓社、1996年。
- 10 滝田賢治「ブッシュ外交の方向性」『海外事情』2001年2月号。
- 11 田中 浩『ヨーロッパ知の巨人たち』日本放送出版協会、2006年。
- 12 ノーマン・デイヴィス、別宮貞徳訳『ヨーロッパ』全4巻、共同通信社、2000年。[Norman Davies, *Europe: A History*, Oxford University Press, 1996]
- 13 モーリス・デュヴェルシュ、宮島喬訳『ヤヌス西欧の二つの顔』木鐸社、1975年。[Maurice Duverger, *Janus: LES DEUX FACES DE L'OCCIDENT*, HOLT, RINEHART AND WINSTON, 1972]
- 14 ジョン・A・ハードン編著、浜寛五郎訳『現代カトリック事典』エンデルレ書店、1982年。[John A. Hardon, S.J., *Modern Catholic Dictionary*, New York: Doubleday, 1980]
- 15 アラン・パディウ、長原豊他訳『聖パウロ 普遍主義の基礎』河出書房新社、2004年。[Alain Badiou, "SAINT PAUL; LA FONDATION DE L'UNIVERSALISME", Presses Universitaires de France, 1997]
- 16 廣松渉他編『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、1998年。
- 17 ドミニク・フォルシェー、菊地伸二他訳『年表で読む 哲学・思想小事典』白水社2001 [Dominique Folscheid, *Les grandes dates de la philosophie antique et médiévale, Les grandes dates de la philosophie classique, moderne et contemporaine*, Paris: Presses Universitaires de France, 1996, 1997]
- 18 水野忠夫『ロシア文化ノート』南雲堂フェニックス、2001年。
- 19 山内 進編『フロンティアのヨーロッパ』国際書院、2008年。